

『往生要集』 についての覚書

―石田瑞麿氏の業績より想起される二、三の問題―

佐々木 俊 道

一、問題の所在

本論文は、二つの目的で、『往生要集』を取り上げる。一には、日本宗教文化史上の『往生要集』の位置を明らかにすることである。そして、もう一つは、『往生要集』の撰述意図を臨死という観点から考察することである。

どちらの問題も、日本仏教学、日本仏教史という枠組にこだわらず、日本人、ないしは日本文化に多大な影響を与えた文献及び、信仰、他界観の一形態として扱う。

『往生要集』に関しては、石田瑞麿氏をはじめとして、宗派を問わずまた専門を問わず、多くの研究者が、業績を残している。それらの研究の全てを網羅することは出来ない。出来るだけ関連領域の主要な文献に依拠して考察を進めていきたいのが本来であるが、こと『往生要集』の研究に関しては石田氏の研究を通り超して前に進む事は不可能である。よって、本論では、氏の業績に依拠して、そこから想起さ

れる幾つかの問題点を考察してみたい^①。

二、本論

(一) 日本人の他界観と『往生要集』

日本仏教史上における『往生要集』の位置付けは、これまで、往々にして、文化史上の側面からの評価が中心であった。

つまり、『往生要集』が公になることによつて、その影響から、諸々の往生文学または地獄草紙等の絵画、美術等が誕生した^②。

そして、『往生要集』を中心とした、浄土思想の影響下にある様々な営みが、文化として定着していくにつれて、日本人の他界観念も一変していくことになる。

そもそも浄土思想が展開する以前の日本人の他界観とは、仏教伝来以前よりある日本人の基層信仰のうちの来世、死後の世界の観念を指す。

それらの他界観は、仏教の思想、教理に裏付けられた地獄と極楽浄土といったような具体的な観念ではなく、もっと素朴で漠然としたものである。

たとえば、通常、天上、雲の上にある神々の住む高天ヶ原とか地上、水平線上にある常世(トコヨ)、地下にある黄泉(ヨミ)等があげられる。また沖繩においては海の彼方にニライカナイというところがある^③。

しかし、それらは、地獄と天国のように生前の行為等により、何らかの審判を仰ぎ、どちらかの世界に振り分けられるといったような具体的、論理的世界観を有していない。良い事をすれば高天ヶ原に行き、悪い事をするとう黄泉に落ちるといったようなものではなく、必ずしも併存する必要の無い独立した観念であり、地域性を有するものである。そしてさらに、それらの世界が一体どうゆう世界なのかという詳細な記述も歴史上存在しない。その意味で曖昧で漠然としていて貧困で素朴な印象を与える。

たとえて言うならば、色彩にしても高天ヶ原の雲海の白と黄泉の暗闇から連想される黒と言ったような白黒映画のような印象である。唯、理想郷としてのニライカナイのみは多少、色彩を連想することが出来るが、それとて、具体的に、そこがどのような世界なのかという記述は存在しない。

このような日本人の基層をなす他界観が極めて貧困であるという点から、日本人の顕著な正確が類推されてきた。つまり、他界観が貧困だということは、他界への関心が薄いということを意味し、そこから日本人の現世的、現実的な指向性が指摘し得るといふ説である。

ところで、なぜ日本人がそのような性格を持つにいたったかということについては、諸説考え得るところであるが、それ自体は本論の目的とは多少外れるし、紙幅も無いので、諸学説をいくつかここで取り上げることは出来ない。しかし、本論における問題の所在を明らかにする為に、簡単に主要な説のみ以下、提示しておく。

それは、とりわけ日本の自然環境にその原因を求める説である。日本の自然は、言うまでもなく豊かであり、自然と一体になっていれば、あまり食べるのに苦労しなかった。海、山、川に依存することにより容易に生活の糧を得る事が出来た。勿論、宗教、信仰の発露となる自然に対する畏怖もあったが、日本よりもより自然環境が過酷な地域に比べればという前提がつく。

このような状況から、日本の場合には政治制度、統治制度といった社会制度をピラミッド型に厳格に整備して、多くの民を組織的に動員して、大規模な治水灌漑事業のような大規模な土木事業を行って、自然環境を人間が生きられるように変革していく必要性は比較的薄いと見える。

最近の三内丸山遺蹟のような縄文時代の大規模集落が発掘され、そこから出土する高度な技術を要する品々が発掘されることにより、今までの縄文時代の姿とは異なる高度な文化を有していたことが明らかになってきたが、それでも自然に依存する縄文人の姿は変わらない。

これらの点から日本人の現世的、現実的性格が、四季の変化を通じて培われた情緒性を含めて、その性格を規定する要因として、諸学問領域で指摘されるところである^④。

日本よりも自然が過酷で身分制度、奴隷制度が発達した地域においては、現実からの逃避という意味で、また現世での運命を諦めさせる為に、幸福な来世、他界観が、創造されるのであるが、それに対し、日本人の他界観は貧困であった。

(二) 仏教の伝来と浄土思想の展開

仏教伝来以後、時代を経て、平安時代の末期、貴族社会から武家の時代へと移行していく過程で、浄土宗思想が、広まっていたことは言うまでもない。その過程に対する詳細な記述もここでは出来ないが、これからの論の展開上、やはり問題の所在を明確にする為に若干触れておく。

浄土思想が展開していく理由と経過において指摘しなければならぬことの第一点は、まず貴族を中心とする上層階級についてであるが、当時、藤原氏が要職を独占することにより、藤原氏以外の出身の貴族に現世での出世の道が閉ざされて厭世観が広がっていったということである。

第二に民衆の間にも、時代的移行期に必ずつきものである戦乱に苦しめられ、地震、日照り等の天変地異による飢饉が広がっていき、やはり厭世的風潮が支配的になったことがあげられる。

これらのことが複合的に重なり合い、さらに念仏聖の活躍と末法思想の流行といった様々な要因が加わって浄土思想の庶民への展開へと至るのである。

さて、こうした状況の中で、日本人の他界観も決定的に変わっていくのである。『往生要集』に話を戻せば、その中に詳しく説かれている地獄と極楽の、正反対でありながら多種多様な色彩を連想させる他界観に一変していくのである。

それは、丁度、前に日本人の古来からある他界観は白黒映画のごときものだと述べたが、それに対して、浄土思想発達以後の他界観は総天然色映画のように一大転換がなされたと言っても過言ではない。

(三) 『往生要集』の教理学上の位置付け、石田瑞麿氏の研究を中心とした考察

以上の点が『往生要集』の日本文化史上、果たして来た影響であるが、ここでは、仏教の教え、教理という側面から捉えてみることにする。

ここで、本題に入る前に『往生要集』の輪郭を、石田瑞麿氏の『源信・往生要集』（岩波原典日本仏教の思想）の中の目次より示しておく。

往生要集

卷上

序分

大文第一 厭離穢土

第一 地獄、第二 餓鬼道、第三 畜生道、第四 阿修羅道、第五 人道（二不浄、二苦、三無常）、第六 天道、第七 惣じて厭相を結ぶ

第一 方処供具、第二 修行の相貌、第三 対治懈怠、第四 止惡修善、第五 懺悔衆罪、第六 対治魔事、第七 惣結要行

大文第二 欣求淨土

大文第六 別時念仏

第一 聖衆來迎の樂、第二 蓮華初開の樂、第三 身相神通の樂、第四 五妙境界の樂、第五 快樂無退の樂、第六 引接結縁の樂、第七 聖衆俱界の樂、第八 見仏聞法の樂、第九 増進仏道の樂

第一 尋常の別行、第二 臨終の行儀（初行事、次觀念）

大文第三 極樂の証拠

大文第七 念仏の利益

初 十方に對す、第二 兜率に對す

第一 滅罪生善、第二 冥得護持、第三 現身見仏、第四 當來の勝利、第五 弥陀を念ずる別益、第六 引例勸信、第七 惡趣の利益

大文第四 正修念仏

大文第八 念仏の証拠

初 禮拜門、第二 讚歎門、第三 作願門（初菩提心の行相、二利益、三料簡）

大文第九 往生の諸行

卷中

第一 諸經を明す、第二 惣じて諸業を結ぶ

第四 觀察門（初別相觀、二惣相觀、三雜略觀）、第五 廻向門

大文十 問答料簡

大文第五 助念の方法

第一 極樂の依正、第二 往生の階位、第三 往生の多少、第四 尋

常の念相、第五 臨終の念相、第六 龜心の妙果、第七 諸行の勝劣、
第八 信毀の因縁、第九 助道の資縁、第十 助道の人法

文化的には多大な影響を及ぼしてきた『往生要集』は、多くの研究者による業績は多数あるが、その多くが、仏教の文献としては必ずしも高い評価が与えられているわけではない。

日本天台における浄土教の観想念仏から法然以後の口称念仏への過渡期の作品としての位置付け、つまり、法然を主として見る視点がほとんどである。

石田瑞麿氏は、このへんのところを以下のように述べている。

このように見ると、源信の念仏は『往生要集』によるかぎり、かなり明確さを欠いたものといわなくてはならない。時には観想が中心になって称名を傍に置き、時には称名が比重を増して観想に及ぶといった感が拭いきれない。それを曖昧と呼び、不徹底と名づけることは、いささか酷にすぎるけども、善導のような一貫したものがなかったことはたしかである。そこには、源信がみずから求めた一つの限界があったと言つてよい。それはかれが置かれた歴史のなかにすでに求められるものであるが、もっとも重要な条件は、かれが善導に多くを学びながら、ついに『観經四帖疏』（観無量壽經疏）に取り組まなかった事実である。

（中略）

しかしこうした考え方は、法然によって克服される。『選択集』に、

「諸師の釈には、別して十念往生の願と云ふ。善導独り、総じて念仏往生の願と云へり。諸師の別して十念往生の願と云へるは、その意即ち周し。然る所以は、上一形を捨て、下一念を捨つるが故なり。善導の総じて念仏往生の願と言へるは、その意即ち周し。然る故は、上一形を取り、下一念を取るが故なり」（本願章）というものがそれである。
（石田瑞麿著『源信・往生要集』岩波原典日本仏教の思想四四九・四五〇頁）

このように石田瑞麿氏は、『往生要集』が、日本天台の観想念仏からしても不徹底であり、法然の称名念仏からしてもはなはだ中途半端であることを「十念往生の願」を例にして指摘している。

さらに氏は、源信の著作活動においても『往生要集』が、後に書かれた『観心略要集』及び『阿弥陀經略記』に至るまでの未完成の作品であることも指摘する。

しかしもし源信その人の念仏思想を窺がおうとするなら、『往生要集』だけに留まることは担板漢の誇りを免れないであろう。源信にはその念仏思想を發展させたと思われる幾つかのものがほかにもあるからである。

いまこれらを代表するものとして、『観心略要集』と『阿弥陀經略記』の二つを挙げてみたい。（中略）いずれにしても、源信の念仏思想に『往生要集』から『観心略要集』を経て、『阿弥陀經略記』に至るといふ展開を跡付けることが可能である。（同書四五〇頁）

さらに、決定的なのは、文化史上では影響力が絶大であった地獄とか極楽の光景にかなする記述は、むしろ教学上はおまけであって、取るに足らない部分であり、「正修観法」が一番大切な教えであるとしていることである。

こうした意味において、『往生要集』が最初に揚げた「厭離穢土」、「欣求淨土」の二章は、このような絶望から淨土の救いへと導いて行く上に、極めて効果的であった。おのずから、読む者はここに『往生要集』の本旨を見、ここに出筆の意図を探ってきたようである。後世、これに基づいて、地獄草紙や餓鬼草子・病草子などといったものが描かれ、『十樂話讚』などが作られ、あるいは『往生要集』の名のもとに、地獄・極楽の部分が絵入りで版行されるなど、この初め二章を重視する風潮が作られるようになったのもこのためである。

しかしこれは決して『往生要集』の本意を正しく理解したものではない。これらはむしろ『往生要集』の中心課題に近づくための導入部であって、源信の意図はその後の、とくに大文第四・第五・第六の三章にあったものである。先にも述べたように、淨土に往生するための念仏の正しい在り方こそ、念仏同心の人たちの指針となりうるものである以上、それを廻るさまざまな問題を解こうとする部分に重要性があるはずだからである。この意味において、後に法然（一一三三—一二二二）が、とくに初め五章について、要、不要を論じて、取捨を行わない、「始めに、惣じて五門（大文第一から第五まで）に就いて簡ぶとは、上の厭離・欣求・証拠の三門は、これ往生の要にあらず。第四の

正修、第五の助念、この二門は、これ往生の要なるが故に、簡びてこれを取る」（『往生要集詮要』）のべていることは、正鵠をえたものといつてよい。したがって本書の中心は「正修念仏」以下の三章と見るのがもっとも妥当である。（同書四四二—四四三頁）

さらに、法然の専修念仏の立場から『往生要集』を以下のように評価している。

しかも法然による克服は実に一に止まらない。『往生要集』の観想の念仏さえも、さらには常行三昧も臨終の行儀も、多くが捨てられる。法然が『往生要集釈』の諸門の要・不要を論じ、一貫して取捨を行なったその跡を見ても、明白である。たとえば「念仏と云ふは、これ観察門の異名なり。然るに念仏の行に於て、また観想・称名あり。二行の中に於ては、称名を要となす。……往生要集の意、称名念仏を往生の至要となす」と論じた称名重視、あるいは常行三昧など、平生・臨終を説いた別時念仏について、こともなげに、「下の別時等の五門、また至要にあらず。これを以つて知るべし」と論じて、捨てて顧みない態度などは、それをよく語っている。もつとも、法然のような「選択」に終始した人にとっては、時代の制約として、源信の『往生要集』には捨てなければならぬ多くのものがあつたとしても、止むをえないと言わなければならないまい。（同書四五〇頁）

以上、述べきつた石田瑞麿氏の論点を再度、簡略にまとめてみると、

- 一、『往生要集』は源信においても『観心略要集』、『阿弥陀経略記』に至る過渡期の未完成の作品である。
- 二、『往生要集』の中で一番重要なのは、「正修観法」であり、それ以外の地獄、極楽等の記述は、必要性があまり無い。
- 三、法然の「称名念仏」、「専修念仏」、「選択」の立場からみるならば、やはり、『往生要集』は観想念仏から称名念仏に至る超克されるべき作品であり、取捨選択の要がある。

次に、この三点に関して、本論で最初に示した視点にそって、石田瑞麿氏の説を再検討するとともに、『往生要集』におけるいくつかの新しい視点を提示してみたい。

三、結論と今後の課題

(一)『往生要集』の評価に関わる新しい視点

まず最初に前にあげた三点のうちの一における『観心略要集』についてであるが、この作品については、西村岡紹氏と末木文美士氏の『観心略要集の新研究』により、源信の作品ではなく、後世の天台本覚法門、口伝法門と呼ばれる作品であることが立証されている。このことから、『往生要集』における教理学上の評価の一角が崩れることになる。つまり、『往生要集』が、源信の生涯の作品の中において、『観心略要集』に至る過渡期の作品という言い方は出来ないことになる。

さらに二と三についても、『往生要集』がその時代にはたしてきた役

割をそのまま評価し、天台学の「教観雙美」の立場から、執筆当時の一つの完成された作品としてみるならば、取捨選択の必要性なぞ無く、むしろ地獄、極楽に関する大部の記述に関しても、それなりの存在意義を素直に認めることが出来ると思われる。

ここで、話は急に方向を変えろが、エリザベス・キューブラー・ロスの数々の業績、また近年の臨死に関する諸問題、つまり臓器移植をめぐる脳死の問題、末期医療の患者に対するホスピス、安楽死の問題、または臨死体験に関する学問的研究の認知といったことから、死についての直接的な取組みがなされている。こうした研究のいくつかを紹介した上で本論を進めていくことが出来るならば、さらに問題点をはつきりさせることが出来るのであるが、紙幅の関係上、次の機会に譲らざる終えない。

つまり、ここで提示する新しい視点とは、『往生要集』を臨死という観点から再考察する試みの一端である。

これまでの仏教学に言える全般的な傾向であるが、仏教が宗教として生と死の問題を両方射程にいれなければならないはずなのに、人間はいかにして生きるべきか、という現世の問題を中心として扱う傾向があった。

法然の称名念仏にしても、一心にひたすら阿弥陀様の救いを信じ、「南無阿弥陀仏」と称えさえすれば、全ての人が往生して救われるのであるから、逆に言うならば、来世での往生が確実に約束されるのであるから、全ての人が安心して現世を生き抜くことが出来るという、言はば来世中心の浄土思想から現世中心の教えに転回するとも言える。

それをさらに進めたのが親鸞であることはここであえて言うまでもない。

そのことが、源信を、教学上、法然に至るまでの過渡期の人物として位置付ける要因となっている。さらに、前に述べた、日本人の現世的傾向も、そのような流れを作り出す一因になっているとも言えなくもない。

本来、死は生の延長線上に位置し、いかに生きるかということは、いかに死ぬべきかということと裏腹であり、決して切り離すことは出来ないのであるが、どちらかという生、つまり現世に重きを置いた見方が主流となってしまう。

そこで本論では、前に上げた死に関する様々な研究業績に触発されて、もう一度、『往生要集』を死の方に関する入門書という視点から再評価する必要性を提示しておく。

そうすることにより、『往生要集』の中の「正修観法」以外の個所に光りをあてることが出来るのである。

当初、『往生要集』を読みながら、なぜ、地獄と浄土に関する光景をくどくど長々と記述する必要があるのかということに、やはり、疑問をもったのであるが、まさに、その理由は人が死を迎えようとする時に、その一瞬に浄土の光景を目の当たりにして、安らかに死をむかえることの一点に集約されるのではないかと思われる。人間の脳における医学的な領域に立ち入るつもりは無いが、色彩に富んだ地獄と浄土に関する光景の記述は、それを読む人にとっては、かなりのインパクトがあると思われる。それが、絵画になれば、さらにその効果は絶大

であったであろう。

これにより、日本の末期医療、ホスピスの最初でもある二十五三昧会の手引書としての性格も浮かび上がってくると思われる。^⑥

(二) 本覚法門研究への展望

最後に、源信と本覚法門研究の展望について、若干触れておく。^⑧多くの本覚法門文献が、源信をその作者として仮託されている。源信と本覚法門の関係については、石田瑞麿氏は以下のように指摘する。

しかし改めて法然の専修念仏を考えると、それがかれ自身の行なった一日六万遍などといった称名として鼓吹される場合には、たんに称名に止まらないで、観想的な心の状態を生じ、またそれを期待する結果にもなりかねない。

(中略)

ところで、この克服を成し遂げた者は弟子の親鸞であるが、それを可能にしたものは何かと問うとき、わたしは、それが源信の『観心略要集』や『阿弥陀経略記』などを受けた『往生要集』とは別の系統で醸成された思想であったと答えなければならぬ。それはいわゆる本覚門の思想であり、口伝法門に負うものであった。そうでなければ、親鸞の説く本願他力の眞実信心といった同向の思想が生み出されてくる理由は到底考えられない。口に称える念仏も、心に抱く信心も、仏からあたえられたものであって、みずから努めて行なう自力の念仏や

信心ではないとする、念仏の自力性の超克、真実の発見、いわば「他力のなかの他力」という絶対他力は、法然の念仏から直線的にでてくるものではなくて、法然が捨てて無益とした別の思想を俟って始めて、浮かび上がってくるはずである。

(中略)

しかし一つだけ触れて置きたいのは、『往生要集』から『阿弥陀経略記』へと展開した顕著な信重視の動向である。(同書四七五・四七六頁)

このことから言える事は、源信から法然、さらに親鸞へと本覚法門を経て、行から信重視の道筋が示されている。つまり、『観心略要集』はひとまず源信から切り離すとして、もう一つの『阿弥陀経略記』を考察することによって、日本天台内部における源信から本覚法門への展開が明らかになると思われるが、このことについては次の課題として何れ取り上げてみたい。

さらに、源信撰とされている本覚法門文献と『観心略要集』の関係という面をとつても、今後興味深い研究テーマとなり得る。

註

①『往生要集』についての研究は、石田瑞麿氏の業績が中心となる。石田氏の主要な研究成果は、『浄土教の展開』春秋社、『源信・往生要集』岩波原典日本仏教の思想に収められる。また、『往生要集』そのものを研究対象としたものに、『往生要集研究会編』『往生要集研究』永田文昌堂、福原蓮月『往生要集の研究』永田文昌堂等があげられる。

②『往生要集』に影響をうけた文学としては、『栄花物語』、『源氏物語』、『平家物語』等があげられる。また、和歌についてもその影響は非常に大きく一々あげつらうことは不可能である程である。美術についても地獄草子、餓鬼草子、阿弥陀来迎図、地獄極楽図等、やはり計り知れない程存在するのは言うまでもない。

③記紀神話には黄泉の国という地下他界、根の国という地下ないし海上他界、ははの国や常世の国という海上彼方の他界、高天ヶ原という天上他界、海神(わたつみ)の宮という海中他界が記されている。この世の葦原中国(あしわらのなかつくに)と自由に往来できるものとされた。『万葉集』の挽歌には山中他界観が圧倒的に多く、「山隠る」などの表現で歌われ、天上他界観も海上他界観もそれについてである。地下他界観はきわめて少ない。沖繩ではあの世をグシヨウという。また海上彼方の世界をニライカナイとかニールラスクという。オボツカクラという天上の楽土も考えられていた。(以上『日本宗教事典』弘文堂参照)

④たとえば、田村芳朗氏は、『日本仏教史入門』角川書店の中で、「日本の縄文文化の時代は、いまのべたように新石器時代にあたるが、ヨーロッパにおける石器時代の特徴として、磨製石器の出現、土器の制作、農耕・牧畜の生産活動などがあげられるのにたいし、日本では、磨製石器や土器は存続しながら、農耕・牧畜の生産は知られず、食用になる植物を採集したり、狩猟や魚つりで生活を立てていたので、(中略)当然、生産物の余剰蓄積ということもなく、それによって財をなすということもなく、階級の対

立もおこらず。権力者を中心とする集団生活もつくられなかった。(中略) 自然採集の生活が続いたということは、日本の国民を非常に自然順応的なものにさせることになったので、社会意識の欠如のかわりに自然順応の性質がつつかわれ、日本独特の文芸や心情を生み出したのではあるまいか。なお、これには、四季適当に変化する日本の気候・風土も関係している。」

(十七・十八頁)さらに、「本来の日本人の考え方、これを古神道と称するならば、その古神道においては、さきに見たごとく、自然なる現実、自然なる人間が、そのまま肯定され、現実を否定し、人間を超越する思想は存在しなかった。その典型的な例として他界観があげられる。日本の古代神話に高天ヶ原・中津国・黄泉国の三世界が立てられているが、本居宣長が「山川本草のたぐひ、宮殿そのほか万の物も事も・・・此の御国土の如くにして」(『古事記伝』三之巻)と解説しているように、天上界である高天ヶ原には、地上界の中津国と同じように山川本草あり、農工商が営まれ、男女の生活があり、両界は断絶せず、連続的で往返が自由である。黄泉国は、死者のおもむく暗黒の地下界であるが、やはり地上界と連続的で、現身のまま訪問し、また帰ってこられるのである。なお、この死者の世界は、きたなく、けがれた所とされているが、それ以上の深刻・微細な描写はみられない。仏教における浄土や地獄の描写と比較すれば、古神道は現世中心であり、現世超絶の觀念にとほしいことが、いつそう理解されよう。」(二九・三十頁)と指摘する。

以上、当註で紹介した田村氏の成果は一般向けに書かれた入門書であるが、日本仏教史を扱う上で、仏教伝来以前からある日本人の信仰から論じている業績であり、かつ昭和四十年代の文章であり、その間に学問的進展

があり、内容的に再考しなければならない部々も多くあるが、ここであえて取り上げる事とした。

また、最近、青森県の三内丸山遺跡等の縄文時代の遺跡が、あいついで発掘されている。それらの発掘によって、小集団で狩猟・漁労、採集での日暮らしをする縄文人の印象が一変することになる。

前の三内丸山遺跡では、巨大掘立柱建物のみならず、地元では採取できないヒスイ、コハク、黒曜石、アスファルトなども発掘された。これにより、縄文時代にすでに交易をとまなう、高度な技術を持つ大規模集落郡が存在したことがわかつている。

しかして、仏教の性格上、仏教がある地域に伝来し定着する場合には、その地域に本々存在した土着の信仰と複合、混交して、その地域独自の仏教が展開していく。その現象を宗教的複合とかシンクレティズムと呼ばれているが、主に、それらは、宗教学、文化人類学、民俗学の分野で研究されてきた。こと日本仏教を扱う場合には現象面のみならず、教理学を扱う上でも不可欠な視点である。田村氏の業績の多くはこうした視点からとくに教理的な面に応用し、特に日本中古天台の本覚思想を明らかにしている。田村氏の後、袴谷憲昭氏は本覚思想そのものを仏教にあらざる土着思想として批判的に研究し、数々の問題を投げかけている。袴谷憲昭『本覚思想批判』大蔵出版等。

⑤キューブラー・ロスは、言うまでもないが、ターミナル・ケアとサナトロジー(死生学)の世界的権威であり、『死ぬ瞬間』、『続・死ぬ瞬間』、『死ぬ瞬間の対話』、『死ぬ瞬間の子供たち』、『新・死ぬ瞬間』以上、読売新聞

社刊等の著作が日本でも出版されている。臨死体験に関する研究の先駆けは、レイモンド・ムーデーであるが、『かいま見た死後の世界』、『続かいま見た死後の世界』以上評論社、『光の彼方に―死後の世界を垣間見た人々』TBSブリタニカがある。

⑥西村岡紹、末木文美士『観心略要集の新研究』百華苑

⑦『往生要集』完成の翌年、寛和二年（九八六）五月に念仏結社二十五三昧会が結制される。その中心は源信の師、良源門下の覚超をはじめとする僧侶が結集し、毎月十五日、満月の日に集まって徹夜で念仏を称えた。その中からその中から、死を迎える人が出て来ると、その人のために往生院という草庵を建てて、そこに安置する。同志が二人ついて、一日中看語し、念仏を称えつづける。そして、死を迎える時が近付くと、五色の帯を阿弥陀様の手から吊るして、その先を、死を迎える人に握らせる。その者の周りを皆で取り囲み念仏を称える。その時に、その者が、極樂に往生出来るかどうかを確認する為に、質問し、記録する。極樂に往生することが出来る場合には、阿弥陀様の光に包まれて、聖衆来迎の光景を見るのであるが、そうではなくて、暗黒や地獄の火炎が見える場合には、皆で一心に念仏を称えて極樂へと導く。これらの記述は、『往生要集』『臨終行儀』にある。

⑧ここで、『往生要集』と本覚法門について述べること自体、内容からすると、いささか唐突の感はいなめないが、そもそも源信について、今回、扱

ったのは、本覚法門について、その淵源についても一度考察してみる必要があると考えたからである。

さらに、『阿弥陀経略記』の考察の必要性について言及しているが、指摘しておかなければならないことは、『往生要集』と『阿弥陀経略記』の性格の違いである。前者が、極樂に往生する為に、多くの文献から要文を集めた備忘録であるのに対して、後者は、『阿弥陀経』の必要と思われる箇所を抜粋して作成されたものである、『摩訶止観』と『天台伝南嶽心要』の如きものであり、そもそも両方を比較すること自体無理がある。やはり、それぞれ独立したそれぞれの目的において完成されたものであるという原則は崩せない。しかしながら、『阿弥陀経』の中のどの部分を取捨選択したかという意図が出て来るならば、一応の成果になると思われる。